坂中さんと取り組みたかったと今、思うこと

南山大学人文学部心理人間学科　**楠　本　和　彦**

坂中さんと取り組みたかったと私が今、思うことについて記す。その背景についてまず簡潔に記す。ベーシック・エンカウンター・グループや東山紘久先生がファシリテーターチームの中心であった原始エンカウンター・グループ（東山、1992）などのエンカウンター・グループは、私にとってグループアプローチへの入口であった。その後、南山短期大学人間関係科に赴任し、ラボラトリー方式の体験学習の実践を始めた。私にとって、ラボラトリー方式の体験学習は守り、次世代に引き継いでいきたい大事なものである。

１）ラボラトリー方式の体験をPCA、学習者中心の教育の観点から再吟味する

人間関係科はラボラトリー方式の体験学習を学習者中心の教育と位置づけ、「人間の尊厳」（山口、2005）が教育観の基盤として尊重されていた。その教育観は現在も引き継がれている。それを踏まえた上で、坂中さん達と共に、ラボラトリー方式の体験学習の教育観や構造など全般についてPCAの観点から再吟味し、ラボラトリー方式の体験学習の中核をより明確にしつつ、学習者を尊重する教育としての質をさらに高める取り組みをしたかったと思う。

ラボラトリー方式の体験学習はその名の通り、人間関係に関する学習という側面がある。一方で、成長といった方がよりしっくりくる人の変化にも関わっている。例えば、EIAHE'は意識化できている自己の言動や関わりについて、意図的に変化させる学習モデルとして適用可能だと考える。しかし、「時が熟するのを待つ」というような変容や、無意識も含めた、意図を超えた全人的な変容などに、EIAHE'を当てはめようとするには無理があるように思う。PCAとラボラトリー方式の体験学習の対話を坂中さん達と共に行い、人の変化や成長について、より包括的な考え方を目指して再検討したかったと残念に思う。

２）新たなワークショップの創案

私は人間関係トレーニング（Tグループ）をラボラトリー方式の体験学習の中核としてその価値観や形を尊重したいと思っている。一方で、より自由に、クリエイティブな新しい展開を坂中さん達と模索してみたかったとも思う。人間関係科では様々なワークショップが実施されていた。原始エンカウンター・グループもユニークなワークショップであった。それらのエッセンスを生かした上で、自由な発想から自分たちが大事にしたい価値観や形を実現する新しいワークショップを創案できれば、おもしろかったと夢想する。

引用文献：

東山紘久（1992）. 愛・孤独・出会い ―エンカウンター・グループと集団技法― 福村出版

山口真人（2005）.Tグループとは 南山短期大学人間関係科（監修）津村俊充・山口真人（編）人間関係トレーニング第２版 ―私を育てる教育への人間学的アプローチ― ナカニシヤ出版 pp.12-16.